

# サー・トマス・ブラウン著 医師の信仰（その三）

## 第二部

### 第一節

さて、その他の美德としては慈悲が挙げられるが、これを欠いた場合、信仰は単なる観念に過ぎず、現実には存在することにはなり得ない。私は両親から借り受けた憐れみ深い気質と情け深い性向を育むと共に、この美德が明確に書き記された慈悲の法則に叶うものとなるよう、常に努めてきた。また、仮に私自身の真の骨格を示すならば、私は美德を備えた一片の存在として素描されるし、当然ながら、そのように形作られてもいる。私が偏りのない性格を持ち、万物に同調し、共感するからである。食物、気質、空気、その他何事に対しても、私は反感を抱かないばかりか、特別な嗜好さえ持ち合わせてはいない。フランス人が蛙、蝸牛、毒茸を食するの、ユダヤ人が蝗やバッタを口にするのも、私には不思議なことではなく、むしろ、彼らの間に入り、こうしたものを日常的に食してみれば、彼らの胃と同じく、私の胃にも馴染むものであるのが分かる。教会

墓地で摘まれたサラダ菜でさえ、菜園で収穫されたサラダ菜と変わることもなく私には消化出来るであろう。蛇、サンリ、トカゲ、山椒魚を前にしても恐れおののかないし、ヒキガエルや蝮の類いを眼にしても、石を振りかざして退治する気にもなりはしない。これらを忌み嫌う思いは人々の間に遍く認められるが、私自身そうした感情を覚えることはないのである。民族同士の嫌悪感とも私は無縁であり、フランス人、イタリア人、スペイン人、あるいはドイツ人を私は偏見を抱いて眺めはしない。彼らの行ないがわが国の人々と調和を保っている限り、私は彼らを同胞と同じように敬い、愛し、抱擁する。私は第八地帯に生を受けたが、定めにより、あらゆる地域に適応できるだけの性質を備えていると思われる。私は、庭園の外では繁ることが出来ないような植物ではない。あらゆる場所、あらゆる空気が、私にとっては一つの国を成している。どこにいようと、どの経線の下にあらうと、私はイングランドにいるのだ。私は難破を経験したことがあるが、海と風に対しても敵意を抱いてはいない。嵐の只中でさえ、学び、遊び、眠ることが出来る。要するに、私は何事からも顔を背けはしないのである。悪魔以外の何らかの存在を

生田省悟・宮本正秀 訳

断固として嫌悪あるいは憎悪している、即ち、少なくとも何かを和解の余地もないほどに忌み嫌っていると言へば、真心から咎めを受け、唾つきと呼ばれるであろう。一般に嫌悪される対象のうちで、とりわけ私が非難し嘲笑するものがあるとすれば、それは理性と美德と信仰の大敵、即ち民衆である。この怪物じみた大群は、個別にみれば人間であり、神の被造物として理性を備えてはいるが、渾然一体となれば一個の巨大な獣と化し、ヒュドラーにもましておぞましい怪物へと変身する。彼らを愚か者と呼んだとしても、慈悲に違反したことになどなりはしない。神聖なる書物の著者たちは皆、彼らに対してそのような呼称を与え、ソロモンも正典にそう記している。また、これを信じることは私たちの信仰における要点の一つでもある。私は、卑しく取るに足らない人々だけを民衆という呼称に含めていたのではない。郷紳の中にさえ暴徒がおり、その頭脳は低俗で、妄想に駆られた思ひは民衆と同じ機軸に基いて動いている。資力によって多少なりとも弱点を繕い、財力で愚かさを補填しているとはいえ、彼らは職工と変わるところがない。しかし、算盤の計算において、数字が三つ四つ集まったとしても下列に置かれた一個の数字に及ばないように、裕福でありながら真の判断と価値とを知らないこれら一群の者たちは、彼らの足元に置かれる多くの寄る辺ない人々よりも劣っている。論談家に似た物言いをすれば、紋章を持たない貴族が存在する。即ち、生来の威厳というものがあつて、優れた資質と卓越した美点に依つて、一人の人物が他と肩を並べたり上位を占めたりするのである。昨今の時勢は腐敗し、現在の習俗も誤つた方向へ進んではいるが、当初の原始国家においてはまさにこ

のような機構が存在していたし、政治が汚れなき搖籃期のままに秩序を保つていれば、この機構は依然として存続していたに違いない。とはいえ、腐敗がはびこり、節度を欠いた欲望のままに、見識を備えた人々ならば軽蔑するはずのものが追い求められている。誰もが富を掻き集めてはうす高く積み上げる放縦さを手中に収め、何をしようとい何を買ひ求めようと構いはしないという権限と特権を持つに至つたのである。

(1) ブラウンは、古代の地理学者が世界を緯度の方向に区分するのに用いた方法を踏襲し、イギリスが「第八地帯」にあるとしている (OED, climate. 一を参照)。

(2) 『箴言』一・二二、八・五等。

(3) 恐らく、上下二列の玉を備えた算盤を踏まえた表現であろう。これについては、第一部第四十二節に対するマーティンの註(三〇五ページ)が詳しい。

## 第二節

偏らず分け隔てをしない私の氣質が、この高貴な美德へとさらに私自身を近づけようとしている。この美德に叶つた性質に生まれつくこと、また教育によつて植え付けられたり無理に接ぎ木されたりするのでなく、自然の種子から育てられることは幸福である。とはいえ、専ら個々の属性に導かれるばかりで、自らの性向を律するに理性の法則に勝るものを持たないとすれば、私たちは道徳家に

過ぎず、神学は依然として私たちを異教徒と呼ぶであろう。従つて、慈悲というこの大いなる課題には、他の動機、目的、衝動がなくてはならない。私は同胞の飢えを満たすためではなく、神の御意志と御命令を完遂するために施しを与え、それを求める人のためにではなく、それをお命じになられたお方のために財布を取り出す。私が人を助けるのは、窮状を訴えるその人のことばの巧みに促されたからでも、憐れみに動かされやすい私自身の性質を満足させるためでもない。そのようなことは未だ道徳心に基く慈悲であり、理性よりはむしろ憐憫の情に由来する行為に過ぎないからである。単なる憐れみに誘われるまま他人を救済する者は、相手のためではなく、自らのためにこれを行なう。相手を不憫に思うことによつて、私たちはその窮状を自らのものとし、相手を救うことで自分自身をも救うからである。情け深い人々が一般に考えることではあるが、いつの日にか我が身に降りかかってくるかもしれないという危惧に基き、他人の不幸に救いの手を差し伸べるのもまた、誤つた発想であろう。これは卑劣にして狡猾な種類の慈悲であり、自らが同様の境遇に陥つた場合に人から憐れんでもらうのを予め請い求めているように思われる。私の観察によれば、自らを乞食と呼ぶ者たちは民衆ないし群衆のうちにあつたとしても、間違ひなく少数を選んで哀願の矛先を向けている。経験を積み、技量に長けた乞食の抛りどころとする観相術というものが確かにある。彼らはこれにより情け深い相貌を瞬時に見分け、憐れみの署名と刻印とが窺われる顔を選び出すのであろう。不思議なことに、私たちの顔には魂の座右銘を伝える何らかの徴が現われるものであり、文字を知らぬ無学な者でさ

え、そこに私たちの性質を読み取り得るからである。さらに、人間のみに限らず、植物についても観相術があり、いずれの植物も、内なる形相を示す表象や標識となる外観上の形態を持つと考えられる。神の御指はお創りになられたもの全てに刻印を施しておられる。とはいへ、この刻印は具体的な文字によるものではなく、被造物それぞれ<sup>1</sup>の形態、構造、部分、機能に基くものであり、これらが正しく結び付けられることで、属性を表わす一つのことばが生じるのである。神はこうしたことばによつて星をそれぞれの名でお呼びになられる<sup>1</sup>。アダムもこの文字を用いて個々の被造物に対し、その属性に叶つた名称を与えた<sup>2</sup>。ところで、顔に現われるこれらの徴の他、私たちの掌にも神秘的な模様<sup>3</sup>が記されている。これは徒に働くことのない筆で描かれたものである以上、勢いに任せ無造作に引かれた線に過ぎないなどと言ふべきではない。私自身の掌には他人のそれからは読み取ることも見出すことも不可能な模様<sup>3</sup>が刻まれているからこそ、私は殊更これに注意を払っている。アリストテレスは、その鋭敏かつ卓越した観相術の書物<sup>3</sup>においても、手相術については一切言及していないはずである。だが、私の信じるところでは、難解でしかも神秘的な科学にさらに熱意を傾けたエジプト人たちは手相術の知識を持っていたに違ひない。後に、流浪の偽エジプト人もそれを知っていると主張したが、恐らく、彼らは不完全ながらも二、三の原理を受け継ぎ、時には実際に自らの予知の正しさを証明してみせたはずである。

幾百万もの顔がありながら、二つと同じものがないのは誰もが等しく驚異と思うところではあるが、逆に、私には同じ顔が存在する

場合の方が不思議でならない。何千ということばが二十四文字から無造作に、また、苦もなく作り出されているのを考えてみれば、あるいは一個の人間の体に何百本という線が引かれているのを考えてみれば、このような多様性も必然的なことであるのが容易に理解されるであろう。これらの線が互いに協調しながら、他と同じ容貌を作り上げるのは極めて困難なことに違いない。画家に百万の顔を無作為に描かせれば、どれもが異なったものになるであろうし、実物を前に置いて描かせたとしても、結局のところ、いかに技量を尽くしたところで眼に見える差異が識別されよう。あらゆる事物の手本、即ち模範とは、それが含まれる種のうちで完全この上ないものことだからである。従って、たとえこの手本を凌駕し、超越したとしても、手本とはかけ離れ、必ずしもあらゆる点で合致している訳ではない以上、私たちは手本よりも劣るのである。被造物同士の類似は自然の多様性を貶めるものではなく、ましてや神の御業を損なうものでは決してない。似通ったものの間でさえ相違が認められるし、一致していると思われるものであっても明らかな食い違いが識別されるからである。人間が神に似ているというのもこれと同じ意味においてであり、私たちは神と類似する点においてこそ、神とは決定的に異なっているの。あらゆる点で一致するほど、互いに似通ったものが存在したことなどかつてなかった。常に何らかの差異が保持され、これが忍び込むことで同一となる事態が妨げられる。この差異がなければ、二つの個別のものは類似するのではなく同一となってしまうであろうが、これは決して起こり得ないに違いない。

- (1) 『詩篇』一四七・四。
- (2) 『創世記』二・一九一・二〇。
- (3) アリストテレスに、これに該当する著作は見当たらない。
- (4) ジプシーを指す。
- (5) 言うまでもなく、iとj、uとvがそれぞれ一文字と見做されていたため、アルファベットが二十四文字になってしまうのである。

### 第三節

哲学から慈悲へと話を戻すならば、私はこの美德を狭い意味で理解してはおらず、施しを与えることだけが慈悲であるとか、一つの惜しめない行為が慈悲の全てを包括し得るなどと考えてはいない。賢明にも神学は慈悲の行為を幾つにも枝分けし、この狭い道にも善へと至る数多くの経路があるのを教えてくれている。善行を為すのに多くの方法があるように、慈悲を持つにも数多くの手段があると思われる。肉体はもとより、魂や運命にも欠けるところがあり、私たちが能う限りの慈悲の手を差し伸べるのを求めている。私は無知を理由に他人を軽蔑するのではなく、むしろ、ラザロに対して抱くのと同じ憐れみをもって眺めるのである。誰かの肉体に衣をあてがうのは、その裸の状態にある魂に着物を与えるのに勝る慈悲ではない。他の人々の理性が私たちの与えた仕着せを纏い、彼らの借り物の理解力が私たちの寛大さを称えるさまは、尊重に値する光景である。これは善行の最も安価な手段であり、自らの輝きを陰らせることなく相手を照らすという太陽の自然の恵みにも似ている。善のこ

の部分において躊躇し、卑しい態度を取るのはこの上なく浅ましい貪欲であり、金銭に対する執着よりも軽蔑されなければならぬ。私も（学者を自認する以上）慈悲の行為に心がけるべき責務を負っているからには、自らの頭脳を知識の墓場ではなく貯蔵庫としている。学問において私は占有を目論むのではなく、共有を求めており、自分自身のためばかりではなく、自らは学び得ない人々のためにも研究に専念している。また、私以上に豊かな知識を持つ人々を妬んではおらず、むしろ私よりも知識が劣っている人々を憐れむのである。私が人に教えるのは、自らの知識を行使するためでもないし、自らの頭脳のうちに知識を育みながらえさせるためでもない。むしろ、他人の頭に知識を植え付け繁殖させることを目的としている。また、研鑽を積む過程において私を落胆させる思いがただ一つあるとすれば、それは、身につけた知力が私自身と共に減じざるを得ず、尊敬する友人たちの間にさえ、それを遺贈出来ないということである。私には、誤謬を理由に人と争ったり、人を軽蔑したり出来ないばかりか、見解の相違がなぜ愛情を分かつかも理解出来ない。哲学か神学かを問わず、論争、議論、討議は分別をわきまえた冷静な人々によって交わされる限り、慈悲の法則を損ねることがないはずだからである。しかし、いかなる論争であれ、激情に任せて行なうのであれば、本来の目的にはそぐわなくなってしまう。この場合、理性は吠犬同然に間違つた臭いに吠えかかり、当初の問題を放棄するのである。これは、論争が決して決着を見ないことの一因にもなっている。つまり、題材が申し分なく提供されているにも拘らず、殆ど論じられないまま、徒に横道に逸れることで議論が膨れ上がって

医師の信仰（その三）（生田省悟・宮本正秀）

しまつし、瑣末な問題にまつわる余談が主題と同等に大きく扱われることもしばしばなのである。信仰の基礎が既に確立され、救済の原理も皆の承認を受けているからには、熱を込めて論じ合うべき争点が数多く残されているはずもない。とはいへ、神学はもとより、さらに劣つた学問においても、激論の交わされたいめしはない。ルーキアーン・スにおけるSとTとの攻防は、いかにも「蛙鼠合戦」に似た激しい小競り合いではないか。ユピテルの属格を巡って、文法家たちが切りつけ合っているというのは何たることであろうか。彼らはなぜ、プリスキアーン・ヌスの頭脳を救うために自らの頭脳を傷つけようとするのか。「デモクリトスがこの世にあれば、嘲り笑つたことであろう」。実際、賢明なる論客の間でさえ、一つの見解がささやかな勝利を取めるために、あるいは一つの榮譽をさもなく獲得するために、いかに多くが傷を負い、信頼を損なっていることであろうか。学者とは温和な人種で、武器を携えたりしてはいないが、その弁舌はアクテイウスの剃刀よりも切れ味鋭く、その筆は雷鳴にもまされて遠く、また大きく轟いている。私は情け容赦のない筆の猛威を被るよりは、むしろ蛇砲の衝撃に身をさらす方を選びたい。賢明な王侯が学芸を庇護し学者を寛大に遇するのは、単に学問に情熱を傾け、詩神に帰依しているからではなく、記憶に残る著作を通じて自らの名前が永遠に伝えられることを望むかたわら、復讐心に燃える後の時代の筆を恐れているからに他ならない。即ち学者とは、王侯が役割を演じ終え退場する段になると歩み出て、彼ら王侯が登場した場面に含まれる教訓を伝え、彼らの美德と悪徳の目録を後世に残すべき人々なのである。確かに、歴史の編纂には良心の働きが大い

に必要とされる。また、語り継がれるべき話に悪評が記されることに勝る屈辱はあり得ない。悪評こそは紛れもない虚偽の典型であり、私たちの善き名前を諸国と後世に誤つた形で伝えるものなのである。

\* JovisがJupiterか。

- (1) ルーキアアーンヌスに、ギリシャ文字シグマ(Σ)とタウ(Τ)との争いを巡る『子音の裁判』という風刺詩があるのを踏まえている。
- (2) かつてホメーロスの作とされたことのある疑似英雄詩。
- (3) JupiterはJupiterの属格であり、JovisはJupiterの古名Jovisの属格である。
- (4) 五世紀頃の文法学者、ちなみに、成句「プリスキアアーンヌスの頭を叩き割る」が文法の規則を破るという意味で用いられていたらしい。
- (5) ホラーティウス『書簡』二・一・一九四。
- (6) 占師アクティウスは公衆の面前で、剃刀によって砥石を断ち切ったという(リーウィウス一・三六)。

#### 第四節

慈悲に対する背反行為はもう一つあるが、いかなる著作家もこれに触れたためしはなく、これに留意した者も殆ど見当たらない。即ち、個々の職業、技能、身分全般に関わるものではなく、各国民の全体に向けられた非難のことである。私たちは忌まわしい形容語句を用いて互いに罵り合い、情け容赦のない論法によって、少数の性向から全体の習癖を決めつけてしまっている。

イングランド人は謀反人、スコットランド人はならず者、イタリア人は男色家、フランス人は愚か者、ローマ人は腰抜けで、盗みを働くカスコーニュ人、傍若無人なスペイン人、大酒飲みのドイツ人<sup>1)</sup>。

クレタ人を嘘つき呼ばわりした聖パウロは、遠回しに、しかも他ならぬクレタの詩人を引用して、そう言ったに過ぎない<sup>2)</sup>。全体を誹謗中傷するというのは、ただの一言で千人を傷つけ、一撃の下で一国の名譽を死に至らせるといふ点からすれば、手段こそ異なっているにしても、ネロ<sup>3)</sup>が考えたことと同じく血なまぐさい発想である。時代に対して口汚ない罵声を浴びせ、一時の激情に身を委ねては人々を再び理性に目覚めさせようとするのもまた、完全に狂気の沙汰であらう。嘲笑することで時代を善へと導こうと目論んだデモクリトスは、時代を嘆き悲しんだヘーラクレイトスと同様に深刻な心気症を病んでいたのではなかったか。民衆が本来の気質、即ち彼らの愚劣さと狂気とに駆られている光景を目撃したとしても、私はは憂鬱に陥ったりはしない。知恵が広く世間に行き渡ってはいないこと、美德が少数の者の特権であることを、私自身が十分に承知しているからである。悪徳を壊滅させるために尽力する人々が結果として美德をも滅ぼしてしまうのは、相対立するものは破壊し合うことを目論んでいながらも、実は互いが互いを支えるべき生命となっていることに由来する。従って、(悪徳を放逐すれば)美德は生命を失った一つの觀念となってしまう。また、罪悪の蔓延によって善の価値が貶められる訳ではない。悪徳が多数の人々の支持を得たところで、

美德は、それを未だ留めなく僅かな人々においてさらに尊いものとなるからである。美德は、たとえある人々の間では失われたとしても、悪徳に染まらない人々において価値を高め、悪徳の大洪水の只中にあつても全きまま生きながらえる。だとすれば、私は悪徳を目の当たりにしても、これを諷刺するよりは、警告を発し、教へ導くために譴責するだけで満足出来る。善を為し得るほどに気高い性質を備えた人であれば、仮に罵られた拳句に悪徳に陥つたとしても、教へ諭されさえすれば容易に美德へと向かうはずである。また、私たちは皆、善のために弁舌を奮い、これを悪徳の手から守り、傷つた真理の大義を維持すべきであろう。実際、人を真に知ることがあり得ない以上、人を正しく譴責したり断罪したりすることなど、誰にも出来はしない。これは、私が自ら感じ取っていることである。世間から見れば私は暗黒の中にも同然であり、最も近い友人でさえ、雲に包まれた私を眺めるに過ぎないのだ。私を表面的にしか知らない人々は、私が自身のことを思うほどには私のことを思つてはくれないし、私を良く知る人々は、私が自己評価を下すよりは高く私を評価してくれる。私を真に理解しておられる神は、私が取るに足らない者であることを御存知である。神だけが私と世界の全てを御覧になられている。また、物体の表面から反射される光、即ち物体が眼に見える像となつて伝達されることを頼りに私たちをご覧になるのではない。神は外見的属性の助けを借りることなく実体を見抜いておられ、私たちが事物の働きを見るように、その形相をご覧になるのである。さらに言えば、自らを知る者は誰一人としていない以上、他人を裁くことなど出来るはずがない。私たち

医師の信仰(その三) (生田省悟・宮本正秀)

は自らの氣質を賞賛に値すると思ひ込み、それとは食い違つていふだけで他人を非難し、自らと合致し調和しているらしいからと言つては他人を褒め称えている。結局のところ、全ては私たちの誰もが断罪する利己愛に帰着する。慈悲が冷えたとは、今の時世において、また恐らくは過去においても、広く嘆きの種となるところである。私もこの事態を、狂信の炎を顕著に示す人々において明白に読み取つてゐる。慈悲とは、冷静沈着の上ない属性と最も馴染みやすく、謙虚な様相を帯びた美德である。それにしても、自らに無慈悲でありながら、他人に対して慈悲を注ぐことなど期待出来るはずがあるか。慈悲は我が家からと、世間では言われるが、誰もが自分自身にとつて最大の敵、いわば自らの死刑執行人と成り果てている。「殺すなかれ」と神は戒めておられるが、これを遵守する者など殆ど見当たらない。誰も自らにとつてのアトロローポスと化し、自らの命の糸を断つのに荷担してゐるのではないか。従つて、最初の殺人者はカインではなく、死を招き入れたアダムだということになる。アダムは、息子アベルにおいて死の実例を目の当たりにし、もう一人の息子の手によつて死が実証されるのを目撃した。しかしながら、自分自身の考へに照らしてみても、彼は信仰によつて死というものを納得することが出来なかつたのである。

(1) デュ・ベレイ『嘆きの詩集』ソネット六八番。なお、アラウンは原典のフランス語を誤つた形でここに引用しているということである。

(2) 『テトス書』一・二二。聖パウロは、紀元前六世紀頃の伝説的詩人エピメニテースの詩句を引用しているとされる。

(3) スエトニウス『カリギュラ伝』三〇には、「ローマ人の首が一つであれば、一撃でこと足りる」とあることから、プラウンがネロとカリギュラを混同していると考えられる注釈者が多い。

(4) 言うまでもなく、モーセの十戒の第六に相当する(『出エジプト記』二〇・一二)。

(5) 『創世記』四・八。

## 第五節

私ほど、我が身に降りかかる悲慘を恐れず、他人の悲慘を親身になつて憂慮する者はないに違いない。私は片腕を失つたとしても一滴の涙をも流さなければかりか、たとえ四つ裂きの刑に処せられたとしても苦悶の声を殆ど上げたりしないであらう。それでいて、劇を見てはさめざめと涙を流し、自他共に認める名高い詐欺師たちが演じる偽りの悲しみを、心から同情して受け止めることが出来る。悲慘に苛まれている人の苦しみを募らせたり、それ自身が既に耐え難いほどの属性を備えた悲嘆を誰かのうちに増大させたりするのは、憐れみを欠いた残忍な行為に他ならない。これこそヨブの受けた最大の苦しみであり、友による遠回しの説諭は、悪魔が彼に加えた直接の一撃に勝る深手となつたのであつた。本人だけでなくその友も涙すること、悲しみの流れは涸れる。幾筋もの流れに分かれるならば、涙はより穏やかに進み、水路が狭まるのにも満足する。悲嘆をある人の胸から別の人の胸へと移し変えること、即ち悲しみそのものを細分して無同然に帰すことも、慈悲の力をもってすれば可能

であろう。測定可能な事物と変わらずに苦しみも、それが分割が不可能でない限りは、少なくとも痛切に感じられなくなるほどには分割出来るからである。ところで私は、友と悲しみを分かち合うのではなく、それを一手に引き受けたいと考えている。私が友の悲しみを自らのものとすれば、それをいとも容易に追い散らすに違いない。私の外部たる他人の圏内にあつては説き伏せ難い悲しみも、私の理性の及ぶところ、即ち私のうちにあれば制することが可能だからである。常々私は、友情の典型とされる高貴な例が理想の姿として創作された虚構に過ぎず、真に実在した歴史上の人物ではないと考えてきたが、今やそこにはあり得べきものしか見出せなくなっている。ダモンとピテイアス、アキレウスとパトロクロスの英雄的な例に含まれることでさえ、幾つかの理由から、私のように度量の狭い者にも為し得るのではないかと思われるほどである。友のために自らの命を投げ出すのは、慈悲は我が家からという原則の枠内に留まる民衆の感情からすれば、奇異なものに思われるであらう。私自身について言えば、神、祖国、友のためとあらば、自らに關することを顧みたり、自らの性質に負っている事柄を顧慮したりするつもりはない。これら三つに次いで、私が愛しく思うのは私自身である。告白すれば、両親、妻、子供、友人の順に愛すべしとするスコラ学派が定めた愛情の序列を私は遵守していない。信仰の命ずるところを除けば、私は、血縁者の全てに当然寄せるべき断ち難い同情を感じてはいないからである。仮に友に対する愛を近親、しかも命の根源を負っている近親に対するそれに優先させたとしても、第五の戒めに背いたことにはならないのではないか。未だかつて女性に愛情を注



いだことのない私ではあるが、友に対する愛は美德に対する愛と変わるどころがなく、神を愛する思いも自らの魂を愛する思いに劣るものではない。これを踏まえれば、神がいかに人間を愛しておられるか、いかなる幸福が神の愛に込められているかがまさしく理解されるのである。他の一切を排除したとしても、三つの極めて神秘的な結合が存在する。即ち、一つの位格における二つの属性、一つの属性における三つの位格、二つの肉体における一つの魂のことである。これらには実際には個別のものでありながら、一体であるかと思われるほどに結び付いており、異なる二つの魂というよりは、むしろ一個の二重性を形成しているのである。

(1) 『ヨブ記』四・五、八・一一など。

(2) 互いの身代わりとして死を選んだとされる人物(ウアレリウス・マクシムス『史話』四・七)。

(3) 『出エジプト記』二〇・二二。

(4) それぞれ、キリストにおける神性と人性、父と子と聖霊における三位一体、理想的な友情のあり方を指している。

## 第六節

真の愛情には驚嘆すべき事柄が含まれている。それは、二者が二者となり、しかもそれぞれが二者となるという不可解かつ神秘的で、謎めいた体系のことである。私は自分自身にもまして友を愛してはいるものの、この愛が不十分なものに思われてならない。わずか数

か月のうちに愛情が何倍にも増大すれば、それまでその友を全く愛してはいなかったのだと思ひ込むに違いない。友と離れているおりに、再会するときまで私は死んだも同然となるし、共にいるときでさえ、私は満ち足りている訳ではなく、今以上に親密になりたいと常に願っている。結び付いた魂は抱擁だけでは飽き足らず、真の意味で相手そのものなることを願うが、それが不可能であるからには、欲望は限り無く膨らみ、成就する見込みもないまま募っていくしかない。愛情にはもう一つの苦悩が含まれている。即ち、我が身同様に心から愛する人々がいたとしても、私たちは彼らの容貌を忘れてしまい、顔のイデアを記憶に留めておくことが出来ないのである。しかし、これは驚くには当たらない。彼らは私たち自身に他ならず、私たちの抱く愛情によって、彼らの容貌は私たち自身のものとなつているからである。このような高貴な愛情を抱き得るのは、美德において傑出した人々であり、卑俗で平凡な性質の持ち主などでない。この気高い情熱をもって友を愛し得る人こそが、全てに対して十分な愛情を注ぐのである。さて、肉体の彼方を見通し、魂に視線を注ぐほどに自らの愛情を導くことが出来るのであれば、私たちは友情のみならず慈悲においても真の対象を見出したことになると。魂に遺贈し得る最大の幸福は、誰もが究極の至福のありかとするところ、即ち救済に他ならない。救済をもたらすことなど私たちには出来るはずもないが、救済を請い願ひ、自ら獲得しないまでもこれを促すことは、慈悲と敬虔な祈りにおいて可能となる。友の名を列挙することなく、ただ自分のためにだけ祈りを捧げたところで私は心安らかにはなれないし、人との交わりを願う気質からすれば、

隣人との親交を求めようとしない類いの幸福を願うこともあり得ない。笑いきざめいているおりできえ、私は甲いの鐘の音を聞けば必ず、この世を去っていく霊に祈りを捧げ、心からその冥福を願うものである。また、患者の肉体の治療に赴きながらも、常に自らの職業を忘れては、その魂のために神に呼びかけてしまふ。誰かが祈りを唱えるのを見れば、恐らくその人が私にとって凡庸な存在に過ぎないにも拘らず、その人の仕草を真似るところか、その人のために跪かすにはいられないのである。神が私の祈りに耳を傾けておられるのであれば、私とは何の面識もない多くの人が幸せとなり、人知れず捧げた私の祈りによつてもたらされ祝福に与かつているのは疑う余地がない。敵のために、即ち敵の救済を願つて祈ることは決して苛酷な戒めではなく、普段と変わらぬ日々の信仰を實踐することに過ぎない。私には、あのイタリア人の物語を信じていることが出来るはずもないのである。来世における私たちの悲惨を望むのは、悪魔、また慈悲の心を持ち得ない地獄に他ならない。

(一) 不詳。『伝染性謬見』七・一九には、あるイタリア人について「命を救うことと引き替へに、敵に信仰を捨てさせ、その直後に彼を刺殺し、悔悟を妨げ永遠の死をもたらした」とある。マーティン三二二ページは、この記述がフランスの悪名高い法律家ジャン・ポータンの『国家論』に依拠するものと述べている。

## 第七節

危害を一切加えないこと、またこれを被らないことは、忍耐を欠いていたかつての私には申し分のない道徳を含む原則であるように思われた。しかし年節を重ね、落ち着きとキリスト教徒としての性質を身につけるに至り、私はさらに厳格な決意を抱くこととなった。危害などというものは存在せず、仮に存在したとしても、復讐に匹敵するほどの危害はなく、しかも危害を加えることを軽蔑するのが復讐の最たるものであると考えられるのである。即ち、他人を嫌悪することは自分自身を傷つけることに他ならず、相手を受する最も現実の方法は自分自身を軽蔑することであるに違いない。万一、私が自らに似た何らかの存在と相争つていと述べたならば、私は自らの良心に不正を働いていることになる。人間というこの一つの構造物には多くの部分が認められる。要するに、この肉体は種々の相反する性質の一体化を基盤として構築されているのである。私自身、このような一個の存在であると同時に一つの世界を成していると思われる。この中にあるのは、個別の存在が多数ひしめき合っているにも拘らず、さらにそのそれぞれが正反対の性質を帯びたもう一つの世界を孕んでいる。私たちの内側にはそれぞれに潜む敵があり、外側には公けのさらに激しく対立する敵がいる。私は、まさに聖パウロを打ちのめした悪魔に切っ先を突きつけられている思いなのである。私自身の囀内(1)にレバントの海戦(2)が、即ち理性に対する激情の、信仰に対する理性の、悪魔に対する信仰の、そしてこれら全てに対する良心の戦いが見出せないのであれば、私はむしろ無になることを望む。私の中にはもう一人の人物があり、私に対して怒り、私を非難し、命令を下し、脅かしている。私が持ち合わせている良心は、

極めて重い罪惡の槌に耐え得る大理石のようなものでもなければ、些細な過失や失敗の痕跡を漏れなく留める蠟のように軟らかいものでもない。犯した罪が贖われるというのは、罪を犯すのと同様にたやすいという奇妙な信念を私は抱いている。自らの原罪については、洗礼を受けた際に洗い流されたと考えているのである。私はひたすら最後の懺悔、聖餐、遍き免罪の観点から、実際に犯した過ちを神と共に列挙し数え上げている。従って、私は若き日の罪や悪行に怯えてはいないのである。善なる神に感謝すべきことに、私は名付けるほどの罪を犯してはいないし、悪行において際立っている訳でもない。また、私が犯した過ちは、腐敗した人間に共通の吐息から生じており、世に蔓延しているものである。体液に由来する精神の腐敗に匹敵すると共に、名付けようもないほど新奇でおぞましい墮落を孵化させ、発現させる何らかの体質が存在するのだ。彫像と肉の交わりを持ったあの好色漢や放埒な快樂に耽ったネロの体質がこれに当たる。聞いたこともない新星が天空に満ち、大地に植物と動物が溢れているばかりか、人間の精神も恥辱と惡徳にまみれているのである。鈍重な理性と凡庸な氣質の持ち主である私は創意を凝らして新たな惡徳をまたらしたこともなければ、世にあるこれら惡徳の数々に心引かれたこともない。とはいえ、誰にでもある日常的な欠陥は私にも執拗に付きまとい、本性そのものと思われるほどになっている。従って、私は意氣消沈し、このようにならなかつたとして保持していたに違いない自尊心も損なわれ、その結果、自らを最も卑しむべき人間と見做すばかりなのである。懺悔に至るには激しい悲しみを経る必要があると神学者たちは定めているが、私の場合、

醫師の信仰(その三)

(生田省悟・宮本正秀)

悔いるという行為にも私本来の氣質にそぐわないはずの憤り、怒り、嘲り、憎しみといった、性質を全く異にするさまざまな激情が入り込んでしまう。自らの惡徳と対峙し、慈悲の根源たる神に敵対する部分を忌み嫌うことは、自らに対する慈悲の念を損なうことにはならない。神の慈悲に包まれた私たちは、より大きな自己としての世界を模倣しているに過ぎない。この世界においては、それぞれが対立し、相反する顔を見せながらも、全体に対しては慈悲に満ちた關心を寄せている。即ち、個々の不和によって全体としての調和が保たれていると共に、蜂起し一旦支配者となれば一切を壊滅させかねない勢力に足枷がはめられているのである。

(1) 『コリント後書』二二・七。

(2) 一五七一年、レバント海峡の戦いにおいて、キリスト教軍はトルコ軍を全滅させた。

(3) プリーニウス『博物誌』三六・四。

(4) ローマ皇帝ティベリウス・クラウディウス・ネロ(スエトニウス『ティベリウス伝』四三)。

## 第八節

神に感謝すべきことに、人類がアダムから受け継いだ幾百万という惡徳のうちの一つを私は免れている。それは、慈悲にとって不倶戴天の敵であり、人間のみなならず惡魔にとっても第一の根源的な罪である傲慢に他ならない。傲慢とは、名称こそ単音節に収まるもの

の、その屬性においては一つの世界をもつてしても包圍し得ない悪徳である。傲慢を殆ど逃れ得ない境遇に置かれながらも、私はこの悪徳を回避してきている。僅かばかりの知識を得たとか道を究めたなどという評価は、他人にあつては自惚れを煽り立てるものであるが、私を擧げ上がった思いに駆り立てることはない。私は、ある文法家がホラーティウスの一行を解明したからと偉ぶつて自画自賛し、一篇の頌歌に註を施したのを理由に、一冊の書物を編んだ著作家以上に尊大に振舞うのを見たことがある。私自身について言えば、各地の俚語や方言に加え、実に六か国語を解してはいるものの、バベルの混乱以前の祖先よりも侮れているなど主張するつもりはない。当時の世界にはただ一つのことばしかなく、言語学者ないし註釈者として自ら誇る者は存在しなかつたのである。私は幾つかの国々を見て回り、風土の特質を観察し、各地域、各都市の地誌に眼を通したばかりか、それぞれの国の法律、慣習、政治についても理解している。だからといって、鈍重な氣質のこの私は、自らが住まう領域の彼方を一切眺めたことがないながらも機知と賢明さを備えている人々と変わりはないなどと言つてまで、自分自身を高く評価する気にはならないのである。眼の及ぶ範囲の星座全てについて、私は名前ももとより、それ以外をも若干は知っている。しかし、私が出会つたあるお喋りな水夫は北極指示星と北極星の名前しか挙げられなかつたのに、私以上に多弁で、あたかも私よりも上位の天球層に属しているような口振りであつた。私は我が国ならびに身の周りの植物を殆ど知つてはいるが、今のこの知識が、かつて百種類の植物しか知らず、チープサイド<sup>2</sup>で売られている類いでさえ採取して

いながつた頃の知識に及ばないように思われてならない。実際、簡単に計算出来る僅かばかりの知識では一杯にならないほど、頭脳の容量が大きい人々は、全てを知り尽くすまでは、自分は何も知らないと考えるものである。とはいへ、全てを知り尽くすのが不可能である以上、彼らはソークラテース<sup>3</sup>と同じ見解を持つに至り、自分が何も知らないということだけを知る。ホメーロスが漁師から出された謎を解こうとして、憔悴の余り死んだとか、アリストテレスが知識のおぼつかなさを理解し、自然の営みを知るには人間の理性は脆弱に過ぎると幾度となく告白していたのに、エウリポス海峡の潮の干満を調査している最中に溺死したなどは考えられない。私たちが今日学んだことなど、明日にはさらに進歩した判断力によって打ち消されてしまふであろう。アリストテレスが私たちに教えるのは、プラトーンが彼に教えたのと同じく、自らを論駁せよということに他ならない。私はあらゆる学派を一通り体験してはみたが、そのいずれにも安らぎを見出していない。学問の途に就いたばかりの若い学徒ならば、逍遙学派、ストア派、アカデメイア派を名乗るかも知れないが、最も賢明な人々は結局のところ殆どが懷疑派となり、知識の野にヤーヌスのごとく立ちつくすことになるのではない。従つて、私は学校で習得した普遍的かつ信頼に足る哲学を基盤としてゐる。それによつて他の人々と語り合ひ、彼らの理性を満足させ、その一方で、もう一つの憤み深い、経験から導き出された哲学によつて自らの理性を満足させてゐる。秀でた学識を備えていながら自らの無知を嘆いたソロモン<sup>5</sup>は、私の思ひ上がりを謙虚なものに変えただけでなく、努力に対する私の意欲をも挫いてしまった。

さらにもう一つの思いが去来し、私は昔物を閉じるのである。それが説くところによれば、閑雲に知識を求めて日々を無駄に費やすのは虚飾に過ぎず、あと少しだけ待ちさえすれば、この世において苦労と探求の果てに獲得しようとするものも、直感と注入によって享受出来るという。無知のまま憤み深く座し、理性という生まれながらの恵みを授かっていることに心から満足している方が、この世の生に関わる知識を心を乱してあくせく買い漁るよりも、遙かに好ましいのである。このような知識は死によって愚者にも無償で与えられるものであり、私たちが賜る栄光に付随するものではない。

(1) 「傲慢」と訳出した語は *pride* である。

(2) かつてこの場所には、薬用、調理用の各種植物を売る露店があったという。

(3) 『ソークラテースの弁明』二一d。

(4) これに関連する話は『伝染性謬見』七・一三にも見受けられる。

(5) 『伝道の書』八・一六―一七。

(6) 『コリント前書』一三・八―一二。

## 第九節

未だ結婚したことのない私には、二度目の結婚はしないという人々の決心が好ましく思われる。しかし、私は再婚を認めない訳でもなく、いかなる場合にも一夫多妻は許されないと考えている訳で

もない。両性の数が釣り合っていないことなどを考慮すれば、ときとして一夫多妻も止むを得ないのかもしれない。全世界は男のために造られ、男の十二分の一が女のために造られた。また、男が全世界、即ち神の吐息であるのに対し、女は男の肋骨、しかもその湾曲した一片に過ぎない。樹木と同様に人間が交接を伴わずに子孫を儲けられとるとすれば、即ちどこにでも見られ、誰もが行なっているこの性交という手段を用いずに世界を存続させる方法があるのならば、私は満足を感じるであろう。性交とは、賢者がその全生涯において為す最も愚かな行為であり、自らが犯した常軌を逸するほどの卑しむべき愚行について考える際に、冷静な思いをこれほど減入らせるものは他にあるまい。このように述べることによって、私は偏見を抱いているのでも、女性というあの麗しい性を嫌っているのではない。むしろ、生来の私は美しいもの全てに心引かれている。一枚の見事な絵画があれば、たとえ馬一頭しか描かれていなくとも、それを終日楽しく眺めていられる。あらゆる調和を愛するのは私の氣質であり、これは美を愛する以上に好ましいことである。確かに、美しいものの中には音楽があり、クビドローが奏でる耳には聞こえない調への美しさは、楽器の音色を遥かに凌いでいる。調和、秩序、均衡のあるところには常に音楽があるからこそ、私たちは天球の音楽の存在を主張出来る。天球の整然とした連行とその規則的な歩調は、人間の耳には何も伝えてはいなくとも、理解力に向かって、この上なく調和に満ちた音色を響かせている。何であれ、調和に基いて構成されるものは調和を享受するはずである。従って、私には、教会音楽に異を唱える人々の頭脳が均整を保っているなどとは信じ

られない。私自身は、従順な性格であることに加えて、固有の素質を授かっているために、教会音楽をこよなく愛するものである。人を陽気にさせたり狂わせたりする卑俗な酒場の音楽でさえ、私のうちに深い信仰心を突然掻き立て、始原の作曲家たる神への深遠なる思いを湧き上がらせてくれる。このような音楽の中にさえ、耳が聞き分けられる以上に何か神聖なものが潜んでいる。それは、全世界と神の被造物に關して象形文字で記された判然としない教えであり、耳に届くこのような旋律は、余すところなく全世界を理解するのと変わらないほどの真の理解力を育ててくれる。要するに、神の耳元で知的に響いている和音が、人間の耳でも聞き取れるような形で奏でられているのである。私はプラトーンに倣って魂が一つの和音であるなどと断言するつもりはなく、むしろ魂が調和に満ち、音楽と親しく共鳴し合うのだと考えている。かくして、肉体の性質が魂の成り立ちと合致し、適合した場合には天性の詩人として生まれる者もいるが、実際には、人は皆、生まれながらにして律動を好むのである。だからこそ、タキトウスは自らが著した歴史の第一行目を韻文に頼つたし、最悪の詩人キケロまでもが、ある詩人のために熱弁をふるった際<sup>3</sup>には、最初の一文で完璧な六歩格を用いている。私は、私と同じ職業に携わる者が抱く、浅ましい、またキリスト教徒にあるまじき欲望を自らのうちには感じてはいない。即ち、密かに疫病があることを請い願っている訳でもなければ、飢饉を歓迎したり、不吉な星相、天体の由々しき接近、蝕を期待しつつ、天体暦の頁を繰っている訳でもない。また、不順な春や時候はずれの冬を喜びもしない。私は農夫と共に祈り、万事が時節通りに運び、人に

も時代にも混乱が訪れないことを望むものである。時として患者の病が私の手に負えないものであるならば、私自身が彼に代わって具合が悪くなることを願うし、私自身の窮状を救うことよりも患者の病を治すことを望んでもいる。患者の役に立てない場合には、実際には私の善意の努力に見合う報酬を受け取るのだと言わざるを得なくとも、私にはこれを正当な収入と思うことが殆ど出来はしない。死の他にも不治の病があることを、私は恥じるだけでなく、心から悲しんでもいる。とはいえ、これは私自身のためでも、私の技量が及ばないからでもなく、人類全体に関わることだからである。私は人類のことを私自身のこととして憂慮しているのである。より一般的に言えば、文明国家において誰もが尊敬する三つの職業といえどもアゲム<sup>4</sup>の墮落の上に成り立っている以上、必ずしも弱点を免れている訳ではない。医学に不治の病があるように、法律にも解決不能な事例があるし、神学にも矯正不能の悪徳がある。公会議も過ちを犯すことがあるとすれば、個々の法廷が無謬であるなどとは到底考えられない。完璧な規則ですら誤謬を孕んだ人間の理性に基いているからには、ある者の法律は他の者の規則を断罪するだけでしかないのである。まさにアリストテレースが先人の見解を幾度となく復したのには、それが理性に叶うものであったとしても、彼自身の法則と独自の原理とを踏まえた理論にそぐわないからという理由があった。また、聖霊の贈いのみならず、聖霊それ自体の属性さえも私たちの知るところではない以上、聖霊に対する罪<sup>5</sup>については何も言うべきことはない。患者の痛風や結石の治療を、神学者が奢りや貪欲を正すよりも早く行なうことが私には可能である。神学者の手

に余るほどの悪徳でさえ、彼らの教えを打ち捨て、私の丸薬を忠実に服用すれば癒しを得るであろう。私は何も傲慢な口の利き方をしているのではなく、人が皆、自らの治療法に逆らって苦心しているのだと率直に述べているに過ぎない。死こそが、万病に対する治療法だからである。私の知る限り、万能薬は死以外には存在しない。死は脆弱な胃には吐き気を催させるものではあるが、心構えの出来た食欲にとつては神の酒であり、不死をもたらず喜ばしい一服なのである。

\* 「王は初め、ローマの都を支配せり」(ラテン語表記)

\* 「詩人アルキアース弁護」

\* 「これについては、自ら凡庸であることを否定しない」

(1) ブラウンが一六四一年に結婚していることから、本書はそれ以前に書かれたと推測される。

(2) 『バイドン』八六b-d。

(3) 『年代記』一・一。

(4) 『詩人アルキアース弁護』一・一。引用されたラテン語は「In qua me non inficior medicorier esse」である。

(5) 『マタイ福音書』一一・三一一、「マルコ福音書」三・二一九、『ルカ福音書』一一・一〇。

## 第十節

人との接し方について言えば、私は太陽のごとく分け隔てせず、善人にも悪人にも親しみを込めて顔を向けている。私が思うに、悪

人など存在せず、極悪人も最良の人なのではないか。即ち、悪人といえども、善人としての性質を保持し、その圏内に留まっている限りは、善人なのである。世間には協調性を備えた人がいるが、このような人が寄り添って和音を奏でてやれないほどに調和を欠き、軋轢を生じやすい氣質の持ち主などいるはずもない。「徳が偉大であれば、悪徳もそれに劣らず」とは、極めて優れた人々に関する格言であるが、前後を入れ替えれば極悪人にも当てはめることが出来る。墮落し悪にまみれた性質の人々にも未だ損なわれていない部分が残されており、これは周囲と反発することによって、その部分は悪徳となり得る。即ち、著しい反感を示すことによって、その部分は悪徳という敵に汚染されずに済み、さらには、広くはびこる墮落をも免れて全き状態を保ち得るのである。同様の事態は自然界にも認められる。最も優れた苔葉は極めて腐食性の強い物質の中に包み込まれている。さらに私の経験に基いて言えば、毒は自らの内にその解毒剤を含んでおり、これによって自らを自らの毒から守っている。これが必要ならば、毒物の危害は他に及ぶだけでなく、自らにも損害をもたらすであろう。しかしながら、私が恐れるのは内なる腐敗であり、外部との交わりによる汚染ではない。私を滅びしかねないのは、内なる御し難い軍勢に他ならないのである。私は自らを汚しており、臍を持たないあの人物は今も私の中に生き続けている。私には、最初の腐敗が私を蝕み、貪り食っているのが感じられるからには、「主よ、私を私自身からお守り下さい」と連禱の中で唱えらるゝと共に、これを、引き籠もり思いを巡らす際の第一声としている。誰も一個の小宇宙として全世界を携えている以上、孤独な人間など存在しない。

「一人のときほどに、孤独でないときはない」とは賢者の格言であるが、愚か者の口から発せられたとしても真実であることには変わりがない。実際には、たとえ荒れ野にあらうとも、人は決して孤独ではない。自分自身と自らの思いとに伴われているのに加えて、悪魔も共にいるからである。抑え難い反逆者たる悪魔は常に孤独に付きまとい、私たちが世間を離れて物思いに耽っているおりに生じる乱れた衝動を招集する。また、より厳密に言えば、孤独などは存在しないし、単独で存在するものとは神を措いて他にはあり得ない。神は御自身を包含される罔そのものでおられ、御自身だけで存在することがお出来になる。他は全て、性質の異なるさまざまな部分の内におおきみ、その結果として属性が多様化されていることもあって、神のお力にすぎらずには、あるいは神の御手と交わらずには存在することが不可能なのである。要するに、真に単一の存在でない限り、何者も真の意味で孤独ではなく、自分自身のみであることは許されない。そのような存在は神だけであり、他は全て単一性を踏み越えており、必然的に多としてこの世にある。

- (1) 『マタイ福音書』五・四五。
- (2) プルートアルコス『デメトリオス伝』一・七。
- (3) アダムのこと。なお、アダムとエヴァの臍については、『伝染性謬見』五・五でも論じられている。
- (4) キケロ『義務について』三・一・一。

## 第十一節

ところで、私の人生は三十年に及ぶ奇跡であり、これを述べれば物語ではなく一篇の詩となり、世間の人々の耳には寓話と聞こえるであろう。世界のことを私は家というよりは施療院、即ち生きるための場所ではなく死ぬための場所だと考えている。私が見つめている世界は私自身であり、私が視線を注ぐのは自らの肉体という小世界に他ならない。もう一方の世界に関して言えば、私はそれを地球儀のように扱ひ、ときには気晴らしに回転させたりしている。私の外見を眺め、ひたすら私の状態と運勢とを読み取ろうとする者は、私の高度を見誤っている。私はアトラスの肩を遥かに超えているからである。地球とは、私たちの頭上に拡がる天空の一点であるばかりか、私たちの内なる天的、霊的な部分の一点でもある。私を包圍する肉塊は、精神に枠をはめるものではない。地球の天球層の表面が各天球層に向けて自らの果てを告げているからといって、私は、自分にも限界があるなどと納得することは出来ない。私は自らの円周が三百六十度を超えていると考えるが、角度の数字で私の肉体を測ることは出来ても、精神を把握することは不可能である。私は自らが一個の小宇宙ないし小世界であるのを見極めようとしながらも、その一方、自らが大宇宙以上の存在であることを承知している。私たちの内には疑いもなく一片の神性が宿っているが、それは四大に先立つばかりか、太陽に忠誠を誓う謂われをも持たないのである。聖性のみならず自然もまた、私たちが神の似姿であることを教えてくれる。これさえも理解していない者は神に関する序説や第一課すら修めておらず、人間について初歩から学ぶ必要がある。たとえ私が誰にも劣らず幸せであると述べたとしても、他人の至福を



損なおうというのではない。「天が墮ちようとも、汝の思いは叶う」という一文が全てを癒してくれる。従って、何が起こったとしても、それは私たちの日々の祈りが希求していたことなのである。要するに、私は満ち足りており、神の摂理といえどもこれに何を付け加える必要があるというのか。これこそ、まさに私たちが幸福と呼んでいるものに他ならず、私はこれを享受するのだ。これによって私は夢で幸せを感じ、他の人々が明白な真実や現実において享受する幸福に劣らないものを、空想の中で味わい、満足を得ている。実際、何か喜ばしいことが身近かに感じられるのは、五感が目覚めているときよりもむしろ夢見ているときの方である。こうした夢がなければ、私は不幸であるに違いない。目覚めているときの私の判断力は友から遠く離れていることを嘆きかけ、私の不満を募らせるが、夜の優しい夢は私を慰め、友の腕に抱かれていようと思いにさせてくれるからである。私は安らかな休息のみならず、幸福な夢をも賜っていることを神に感謝しなければならない。しばしの幸福感を得るだけで足りる中庸な願いは、夢の中でこそ叶うからである。この世において人は皆眠っているという着想は、明らかに憂鬱によってもたらされたのではない。また、この世の思いは来世での思索に較べれば単なる夢に過ぎず、白日の下でなされた判断に対する夜の幻影の關係に等しい。妄想はこの両者に共に認められるし、一方が他方の象徴や似姿であるときえ思われる。また、睡眠中に人は自らを幾分超えた存在となることから、肉体のまどろみは魂の覚醒でもあるのではないか。眠りは感覚を結紮する反面、理性を解放する。従って、目覚めているおりの思考は、眠っている間の空想には及ぶべく

もない。私の誕生の際の上昇宮は、水の性質をもつ天蝎宮であった。さらに私は土星の惑星時間の生まれであり、自らのうちにこの鉛の惑星の一部を宿しているはずである。私には陽気なところが一切なく、同胞と楽しく賑やかに過ごせるような氣質が備わってはいない。とはいえ、夢の中で私は一篇の喜劇を書き上げることが出来るばかりか、それが上演されるのを眺め、その滑稽さを理解し、着想に笑ってしまい、目を覚ますことさえある。夢においてこうした成果を上げる理性に劣らぬほど、記憶が信頼に足るものであるならば、私は専ら夢の中でこそ研鑽に励み、このときを遡るには祈りを捧げるであらう。だが、私たちの拙い記憶力は夢において理解したことを眠りから覚めたおりには殆ど留めておらず、話の顛末を忘れ、目覚めた魂に対して支離滅裂な断片ばかりを伝えるに過ぎない。アリストテレスは睡眠に関する優れた小論<sup>(4)</sup>を著わしているが、私には申し分のない形で定義が行なわれているとは思えない。その定義を正したとされるガレーヌス<sup>(5)</sup>についても同様である。夜毎歩き回る夢遊病者たちは、眠っているながらも五感の働きを享受するからである。従って、私たちのうちには、モルペウスの支配<sup>(6)</sup>を受けない何かが存在すると言わざるを得ない。忘我の状態に陥り恍惚となった魂が抜殻同然の肉体に留まったまま徘徊するのは、霊が肉体を纏うのに等しい。この場合、肉体の諸器官が感覚を失い、その属性、即ちそこに宿るはずの種々の機能を欠いているにも拘らず、魂は聞いたり、見たり、感じたりすることが出来るのである。また、観察されているところでは、臨終の間際に人はときとして自らの能力を超えて語り、理性を働かせ得る。その瞬間、魂は肉体の結紮を逃れ、本来の自己に回

帰して理性を発揮し、人間の域を超越するほどに力強く議論を展開し始めるのであろう。

- (1) ここに、いわゆる大宇宙と小宇宙の価値の逆転を読み取ることが出来る。
- (2) 『創世記』一・二六―七、『コリント前書』一一・七など。
- (3) 周知の通り、天蟄宮は黄道帯十二宮の第八番目で、恐怖、悪意、死などを表わし、土星の下に生まれた人は冥爵質となるとされた。
- (4) 『睡眠と覚醒について』
- (5) 『筋肉の運動に就いて』二・四。
- (6) 夢を司るギリシャ神話の神

## 第十二節

私たちは眠りを一つの死と呼んでいる。だが、私たちに死をもたらし、生命の家である諸霊を滅ぼすのは覚醒なのである。実際、眠りは生において最も良く死を表わす部分に他ならない。個々の人間は自らの属性を行動に移し、その能力を何らかの形で実行してこそ、真の意味で生きていけると言えるからである。だとすれば、眠っている最中の自軍の兵士を殺害したというテミストクレス<sup>(1)</sup>は慈悲に満ちた処刑者であった。これは、いかに寛大な法律においても考案されたことのない情け深い刑罰である。ルーカーヌスやセネカ<sup>(2)</sup>の想像力がこの方法を発見しなかったことが、私には不思議でならない。眠りとは死であり、これによって私たちは文字通りに日々死を迎えているのだ<sup>(3)</sup>と言える。眠りはまた、アダムが死すべき身となる以前

に経験した死でもある。さらに、私たちは眠りという死によって、生と死のいずれにも偏らない中間点を生きている。結局、死と酷似しているからこそ、祈りを捧げてこの世に半ば別れを告げない限り、私は敢えて眠りに身を委ねることが出来はしない。また、私は神との対話において、次のような別れのことばを述べたのである。

夜は昼のごとくに来たりぬ、  
御身、偉大なる神よ、立ち去ることなかれ。  
夜に似て暗き我が罪が、  
御身の光輝を遮ることのなきように。  
常<sup>(1)</sup>に我が視界のうちに留まり給え、  
我にとりて、昼を作るは太陽にあらで御身なれば。  
眠ることなき属性の御身よ、  
我が神殿の見張りとなり、  
油断ならぬ敵から我を守り給え、  
我の眠るときも、彼らは眼を見開き、閉じることなし。  
我が頭を襲うべき夢は、  
ヤコブの神殿を祝福せし夢<sup>(2)</sup>を措いて他にあらず。  
我が休めるときも、我が魂を<sup>(3)</sup>清き、  
我が眠りを聖なる法悦となし給え。  
されば、安らぎを賜りし我は、  
清らなる思いを抱きて目覚め、  
旺盛なる活力に満ちて、  
足早なる太陽のごとくに歩まん。

眠りとは死なり。ああ、眠りによりて我に試させ給え、死とはいかなるものかを。

また、臥所に就くがごとくに穏やかに、我が頭を藁に横たえさせ給え。

偉大なる神よ、我が安らぎがいかなるものであれ、ついに我を御身と共に目覚めさせ給え。

この願いが叶わば、心静かに横たわる我を御身は眺められん。眠りの果てが、目覚めか死かを我は問わず。

まどろみて我は日々を過ごし、空しくも今、再び眠りに就くために目覚めるばかり。

ああ、私の願って止まぬは、再び眠ることなき永久の目覚めるとき。

催眠剤としてこの祈りを携え、私は寢床へと向かう。眠りに就くに当たり、これ以外の阿片は必要ない。この祈りを終えれば、私は安らかに眼を閉じ、満ち足りた思いで太陽に別れを告げ、復活の時まで眠るのである。

- (1) マーティン三一四―五ページによれば、この話はフロンテイナーヌス『兵法』三・二二―二三に記述されているものであるが、テミストクレース(サラムスの海戦における指揮官)とは無縁であるという。
- (2) ネロが死を迫ったおり、この二人は死ぬための手段を選択することを許された(タキトウス『年代記』一五・六三―四、七〇)。
- (3) 『コリント前書』一五・三一。

医師の信仰(その三) (生田省悟・宮本正秀)

(4) 『創世紀』二八・二二―五。

### 第十三節

私は正義を配分するのに用いるべき手段を、取引の形で正義を果たす際にも多用し、いずれの場合にも等比例を保つように努めている。これにより、私は他人に対しては公平を期しながら、自らを不公平に扱い、「汝の欲するところを他に為すべし」という広く知られた原理において求められる以上の義務を果たすのである。私は裕福な生まれではないし、富に恵まれる星の下にもあるとも思われぬ。仮にそうであったとしても、何者にも囚われない私の自由な精神と率直な気質は、その運命を打ち消し、覆すことが出来るであろう。貪欲が悪徳というよりはむしろ狂気の嘆かわしい一例だと思われるからである。これと較らばれば、自らを蓄尿器と見做したり、自分が死んでいると思ひ込んだりするのは、滑稽な話でも、ヘレボルス<sup>3</sup>の効能が及ばないほどの狂気でもない。理論に基づく種々の主張や各人各様の見解も、それが実行に移された場合に得られた結果ほどに理性を欠いている訳ではない。雪は黒いと主張した者がいたし、地面は移動すると唱えた者や、魂が空気、火、水であるとの見解を示した者もいた。だが、これらは全て哲学であり、ここに一切の謬妄が認められないのは、貪欲に由来する愚行や議論を俟たないほどの影碌<sup>3</sup>ぶり<sup>3</sup>と較べれば明白である。地下の偶像、即ち大地の神に対しては、私は自らが無神論者であることを告白する。世間が崇め立てているにしても、そのようなものを敬う気持ちにはなれないの

である。これを基にした物質が私の体内でいかなる効力を発揮したとしても、その影響や作用が体の外にまで及ぶ訳ではない。私はインドの富を求めて浅ましい計画を立てたり、悪党呼ばわりされかねない行動を企てたりはしていない。専らこのことから、私は自らの魂を敬愛し、自らを抱擁するのに両の手だけでは足りないと思ふのである。アリストテレスは余りにも厳しく、手に溢れるほどの富と幸運を持たない者が真に惜しみなく与えようとするのを許しはしない。これが真理であるならば、私は、快く与える意思と惜しみない善意においてのみ自分自身が慈悲深いのだと告白すべきであろう。だが、貧者の一灯が閃爍すべき行為であるばかりか、この上なく気高い慈悲の手中でもあるのならば、貧しい人々でさえ施療院を設立するのが確かに可能であらうし、富裕な者たちだけが大聖堂を建立してきた訳でもないはずである。私は、他人には気付かれない密かな方法で善を為す機会を得ている。慈悲を施す好機を私自身の窮状から借り受け、私が最も窮しているときにこそ、他の人々の不足を補うのである。自らを役立て、有徳の行ないを配分することによって、ある状況で善行が欠ける場合には他の状況でその不足分を補い、さらには美点を増加させていくのは正当な戦略であらう。私はペルーを望んではいないが、神から賜った属性に叶う形で善行を成し遂げるだけの力量と能力を備えている。慈悲を十分に施すに足りるのは富に恵まれた者である。だが、高貴な精神であるならば、一片の善行を為すべき道を見出せないほどに窮することはあり得ない。「貧者に施す者は主に貸す者」という一文の雄弁さは、説教集を収めた書庫を凌ぐものである。実際、読者がこうした箴言を著者の

語った通りの意味で解するならば、教訓を述べる書物は不要となり、私たちはこれを要約したものによって徳を得られるであろう。こうした動機だけに悲し、私は乞食を見かければ、財布から幾許かを差し出してその困窮を助けたり、神に祈ってその魂を救ったりせずにはいられないのである。彼と私との間に表面的かつ本質ならざる相違があるからといって、両者に共通する、人の手の及ばない部分を忘れ去ることは出来ない。濫縷を纏った惨めな姿で、体も不具で私なわれている者たちではあつても、内に包まれた魂の成り立ちは私たちと何ら変わるところがなく、私たちと同じく神の系譜に名を連ね、救済に至る道を順調に歩んでいる。貧困のない国家を目指して奔走する政治家たちが慈悲を施すべき対象をも取り去ってしまうのは、彼らがキリスト教徒の国家というものを理解していないばかりか、キリストのあの預言をも忘れているからに他ならない。

- (1) この部分の論議は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』五・三―四を踏まえている。
- (2) 『マタイ福音書』七・一二、『ルカ福音書』六・三一。
- (3) ヘレポルスは一般に狂気の治療に用いられていたが、ホラーティウス『諷刺詩』二・八・八二には、「食欲には大量のヘレポルスを投与すべし」とある。
- (4) キケロ『アカデミア』二・三―一には、激んだ水が黒く見えるならば、雪も黒でなくてはならないというアナクサゴラスの見解が示されている。
- (5) アリストテレス『ソクラテス論』一・二(四〇五a, b)は、魂が空気、火、水であると唱えた哲学者たちの説に言及している。
- (6) 「地下の偶像」、「大地の神」とは金のことである。

(7) 『伝染性謬見』二・五では、金を内服した場合の効能の有無が論じられている。

(8) 『ニコマコス倫理学』一・八、四・一。

(9) 『マルコ福音書』二・四二―四、『ルカ福音書』二二・二―四。

(10) 『ハイドリオタフィア』第一章の冒頭には、豊かな銀鉞を持つペルーのポトシ火山の名が挙げられている。

(11) 『箴言』一九・一七。

(12) この「預言」に該当する聖書の記述は、『マタイ福音書』二六・一一、『マルコ福音書』一四・七、『ルカ福音書』六・二〇、『ヨハネ福音書』一二・一八に見られるが、これらはいずれも未来形で書かれてはいない。

#### 第十四節

さて、慈悲にはその土台や支柱となるべきも一つの部分がある。それは神への愛であり、神のためにこそ私たちは隣人を愛するのである。思うに、神御自身のために神を愛し、神のために隣人を愛することこそ、慈悲に他ならない。真に愛すべきは神御自身、あるいは神の写像ないし影を留めた、いわゆる神の分身ばかりなのである。不可視の存在に愛情を傾けるのは異様なことではない。私たちが真に愛しているのはこのようなものに他ならず、私たちが五感の性向の赴くままに崇めているものは、消らかな愛という称号を戴くには値しないのである。だからこそ、肉眼では捉えられないにも拘らず、私たちは美徳を崇めている。また、私たちが高貴な友において愛しているのは抱擁出来る部分ではなく、感覚の及ばない、腕で抱き寄せることの出来ない部分である。一切が善でおられる神が、御自身

以外を愛されることなどあり得ない。神が私たちを愛しておられるとしても、それは私たちにおける神御自身とも言うべき部分、即ち私たちに移し変えられた神の聖霊を愛しておられるに過ぎない。両親に対する愛、妻子に対する愛情を規定するならば、それらは全て、黙劇や夢に等しく、実体、真理、恒久性を備えてはいない。まず、私たちと両親との間には固い絆が結ばれているとはいえず、それは何となく解けてしまうことであろうか。女を娶れば、妻の中に母が存在することを、即ち今の姿へと育つべき私たちを産み落とした子宮がそこにあるのを忘れてしまう。やがてその女が子供を授けてくれたならば、私たちの愛情は以前の段階を離れ、結婚の床から子供、さらには心に思い描く子孫の姿へと下っていくが、ここに至っても愛情は定住すべき館を構えはしない。子供は齢を重ねるにつれて、私たちの命が終わることを願うばかりか、女を思いやり、法の定めるところに従いつつ、私たちよりも好ましい誰かを愛するようになる。だからこそ、人間は生きながらにして埋葬され、子孫の中に自らの墓を見出すことになる。私は考えている。

#### 第十五節

従って、太陽の下に（コペルニクスならば、太陽の上に、と言うであろうが）幸福は存在しないこと、また、ソロモンの叡智がことごとく込められた「全ては空しく、霊を煩わすのみ」という繰り返し語られる真理は決して古びていないことが、結論として言える。世間が崇めるものに至福はあり得ないのである。アリストテレース

はプラトーンンのイデアを論駁しようとするが、図らずも自らその一つに行き当たっている。即ち、彼の唱える至高善はキメラに似た怪物に過ぎず、彼の言う至福など存在しないのである。神御自身が幸せておられ、聖なる天使たちも幸せていられるものであり、一方で、それを欠いていればこそ悪魔が不幸であるようなもの、これを私は敢えて幸福と呼びたいと思う。これに迫ってくれるものは何であれ、分かりやすい暗喩を介すれば幸福の名に値するであろう。これ以外のものは、たとえ世の人々が幸福と名づけているせよ、私にとつては全てがブリーニウスの記した物語、また単なる幻想、紛れもない妄想の類に過ぎず、そこには名前だけの幸福にさえ勝るものなどあり得ない。主よ、この世の生にあつては、ただ我が良心の平穩、我が感情の抑制、御身と親愛なる友への愛をお与えになり、私を祝福して下さいませう。その暁には、私はカエサルを憐むほどの幸福に与れることでしょう。ああ主よ、これは身のほどを十分にわきまえた慎ましい願いであり、これ以外のものを、地上において敢えて幸福と呼ぶつもりもございません。御身の御手と摂理に対し、この世で規制や制限を設けるつもりなど毛頭ないのです。御身の叡智の赴くままに私をお導き下さい。我が身が滅びたとしても、御身の御心は果たされることでしょう。

完

- (1) 『伝道の書』一・一四、二・二一、一七、四・四、二六、六・九。
- (2) 『ニコマコス倫理学』一・六以降。
- (3) 『マタイ福音書』二六・四二。

(多くの版に付されている書簡三通を以下に訳出しておく。第一の書簡は、ブラウンがケネルム・デイグビーに宛てたものである。前書きからも明らかのように、ブラウンはデイグビーに対し、『医師の信仰』著者非公認版批判を見合わせるよう依頼している。第二の書簡は、これに対するデイグビーの返答に相当する。但し、デイグビーはブラウンの申し出を聞き入れず、『所見』を公表することになる。第三は、『所見』にまつわる匿名書簡である——訳者)

『医師の信仰』の不完全な非公認版に対する御批判が刊行されるとの知らせを受けてお届けする書簡。その正当な版が出版されるに当たつて。

謹啓

常に尊敬を惜しまぬ僕が、現在印刷に付されている著書を取り上げるのをお許し下さい。それは、先頃『医師の信仰』の名で上梓された、ある論文に対する『批判』(私の知るところでは)と題されており、著者があなたであると伝え聞いております。あなたの僕が、『医師の信仰』にはあなたの公正無私な批判はもとより、思慮分別に基く反論に値するものなど何ら含まれてはいないと主張し、さらには、それが真実であることを証明することをお許し下さい。かの出版物(著者が当の私であることを認めます)は幾年も前に執筆したもので、(御拝察の通り)刊行の意図などなかったばかりか、誰かの信条を私の主張に盛り込むことなど全く思いもよらなかったのです。さて、まことに不躓ながら、敢えてこのようなお便りを差し上げる

に至りましたのには、次のような事情がございます。即ち、かの書物は個人的な研究の産物であり、自らの研鑽を積むことを旨とし、どなたかの御高覧に供する思いなどなかつたものであるにも拘らず、不正確かつ不完全に写し取られて私の手を離れ、しかも頻繁に転写された結果、扨なわれた形で流布するはめになったのです。さらには若干の付加と削除、数多くの変換が施された挙句に、節度を欠いたこの時代によって印刷に委ねられたのであります。私はこれに同意を求められてはおりませんし、一切関知してはおりません。公けにされた後の変わり果てた姿は、著者でさえはつきりとは識別出来ないほどであります。このようにして、自著が誤つて世に出たために、私は神の御許しを賜り、意に叶つた本来の草稿を二、三週間のうちに印刷に付すことを決断致しました（これは、間もなく御高覧頂けると存じます）。さもなれば、旧版が存在する限り、その内容が誤解を招くことは火を見るよりも明らかですし、そこに寄せられる一切の所見、註解、言説は、著者ではなく専ら印刷者と筆記者を非難するものとなるに違いありません。今後、拙著をお暇な所に論ずるに足るものとお認め頂けるならば、今の私と同様に躊躇なからさず、忌憚のない御意見をお聞かせ下さいませう。あなたがいかなる結論を下されたとしても、あなたの御批判を賜ることは身に余る光栄でありますし、私は世界の全てをあなたの筆に従わせる所存であります。

敬具

ノリッジにて

一六四二年三月三日

T・B・

医師の信仰（その三）

（生田省悟・宮本正秀）

（一）この年号は、現行のグレゴリオ暦では一六四三年となる。

拜復

今月三日付の御手紙を頂きました後、ただちに従者を遣わせ、印刷者を見つけ出そうと致しました。この人物は、クルック氏（あなたの御手紙を届けられた方）の話によれば、あなたの『医師の信仰』を論ずる、私の名前が付された一篇を印刷しているというからです。私は、今後の作業を止めさせようとした次第ですが、あいにく、従者はこの人物と面会することが叶わなかつたのです。そこで、私はその旨を認めた短い覚書きをクルック氏に託し、かの印刷者に渡してもらうよう依頼しました。あなたが得られた情報には些か誤りがあり、目下印刷に付されているのは、私が著わしたものではありません、別人の筆になるもどたと確信しております。と申しますのも、学識と才気に溢れたあなたの論説に寄せた私の考察など、公けにする価値など全くない、誰一人として真剣に読もうなどとは思わないはずのものだからであります。即ち、それは、あなたの優れた作品に慌ただしく目を通し、取り急ぎ書き留めたものに過ぎないのです。慎重さを要する題材を巡って熱心に筆を奮われたあなたの作品には、理解するだけでも多くの時間と鋭い注意力が必要であります。ところが、私の方は一気に書き上げたものに過ぎません。なにしろ、それを書く契機となつたドーセット卿からの御手紙を受け取つてから、私はそれを二十四時間もかけずに卿への返答として仕上げたのですから。しかも、その時間の一部は、あなたの書物の入手のために費やされております。あなたの書物を読み、説明するようにと卿

は私に求められたのですが、不幸にも私は、それまであなたの尊敬すべき論説について聞き及んでおりませんでした。卿に対するあの返答を御覧頂けるなら、あなたの優れた資質を私が高く評価しているのがお分かりになるでしょう。万一、大胆にもあなたと見解を異にする点が認められたとしても、可能と判断され場合には、あなたの章句を論駁して喜ばせるようにと卿が私にお命じになられたという状況を考慮して頂けるならば、容易にお許し願えるものと存じます。また、失礼な点があったにしても、私信ならばこそという安心感と、その書物に携わるのがどなたなのかを私が(そして卿も)存じ上げなかったことが原因とお考え下さい。

あの書物の著者があなたであることが分かり、大いに喜ばしい限りです。あなたとあなたの優れた作品の双方に対する敬意、賞賛、崇拜以外の念を私が表明することはあり得ない次第を何卒御理解下さい。あなたのように学識を備え傑出した人物と名を連ねて榮譽を得たいという、はかない願いを抱いたところで、私にその才があるはずもなく、全くの不釣り合い<sup>(1)</sup>と言ふべきものでしょう。私は学識をもつて自認するものではありませんし、取るに足らない見解など、

あちこちで偶然に拾い集めた断片に過ぎません。あなたのような手強い論敵と向き合ったり、才気に溢れるあなたの著作を批判するには、学問の確固たる蓄積と修得が必要です。私が浅薄な見解をまき散らしたとしても、それは私信や素人相手の打ち解けた議論の役に立つばかりでしょう。あなたに無断で公けにされた偽の版によって、既に大いなる喜びを得てはおりますが、真正の版が世に出るのを心待ちにせずにはいられません。あなたの御厚情と友愛に与えられるの

が、私にとってこの上もない幸運であることを誓いつつ、あなたの御手に接吻するものです。

敬具

ウィンチェスター・ハウスにて

一六四二年三月二〇日

卑しき僕

ケネルム・デイグビー

(1) ウェルギリウス『アイネーイス』一・四七五。

先に出版された本書の粗悪な版に対する『所見』に目を通された、あるいは今後目を通される諸兄へ。

ポリツイアーンによって「流麗でありながら、精緻な手の持ち主」と評される人々がおりますが、本書に対する『所見』の著者は傲慢にも、それを自認しているのではないかと思われまします。と申しますのも、そこに記されているのは自らの考えであり、しかも一夜にして着想を得たものだというからです。何と慌ただしく生み出されたことでしょうか。事実、それは仕上がったものからも明白です。彼は全体にわたり、実際には反論を免れ得ないはずの箇所を見落としているばかりか、転写上の不手際に基く誤りにさえ必ずしも注意を払ってはおりません。反駁を試みている箇所においても、彼は本書の意図を誤解ないし曲解しており、(時として著者のことばに付け加えられる語句を除けば)自らの用意した着想を伝える契機を得るために、そのような箇所を引き合いに出しているに過ぎません。しか



しながら、彼のこの文書の大部分は彼自身の付随的議論や余談から成り立っており、本書で論じられた内容を踏まえて生じたものでは決してないのです。このことは、賢明なる読者諸兄ならば容易に察して頂けるに違いありません。本書の著者の関知するところではないにしても、私は以上を「理解頂くのが宜しいか」と考えた次第です。この著者は、加えられた非難を軽蔑しながらも、敢えて（申し分のない反論として）自著を公けにすることを余儀なくされた訳であります。伝え聞くところによれば、『所見』を著わした人物は瑣末な批判の文章の冒頭に、不当にもかの高貴なお方の名を掲げておりますが、私は本書の著者をここに持ち出すことを差し控えさせて頂きます。かの人物は後悔の念に駆られることでしょうが、皆様には御満足頂けるのではないかと存じます。

敬白

A・B・

(一) マーティン・ニッパネージによれば、『画家イオソトマスの墓碑』の一節であるらしい。

〔使用テキスト一覧〕

既に述べた通り、翻訳に際してはマーティン版に依拠しているが、その他に参照したものを列挙しておく。

*The Works of the Learned Sr Thomas Browne, Kt.* (London, 1686).

*Religio Medici* by Sir Tho. Browne, Knt. M. D. (London, 1786).

医師の信仰 (その三) (生田省悟・宮本正秀)

*Sir Thomas Browne's Works*, ed. Simon Wilkin (1836; rpt. AMS Press, 1968), 4 vols.

*Sir Thomas Browne's Religio Medici, Letter to a Friend &c. and Christian Morals*, ed. W. A. Greenhill (1881; rpt. Sherwood Sugan, 1990).

*The Works of Sir Thomas Browne*, ed. Charles Sayle (Grant Richards, 1904—7), 3 vols.

*The Works of Sir Thomas Browne*, ed. Geoffrey Keynes (Faber & Faber, 1928—31), 6 vols.

*Sir Thomas Browne: Selected Writings*, ed. Geoffrey Keynes (Faber & Faber, 1968).

*Sir Thomas Browne: Religio Medici, Hydropathia, and The Garden of Cyrus*, ed. R. H. A. Robbins (Clarendon Press, 1972).

*Sir Thomas Browne: The Major Works*, ed. C. A. Partridge (Penguin Bks, 1977).

*Sir Thomas Browne: Selected Writings*, ed. Claire Preston (Carcanet Press, 1995).